

目標
<b>観光客を増やしたい</b>
(観光客が減少している)



<b>悪いところ</b>
観光施設への苦情が多い 観光事業者に協力性がない 都ビジターセンターとの連携が薄い 町にこれだというイメージがない はじめて来る人に分かりにくい町 住民に観光地の意識がない 箱物観光が経営不振(釣場など) 広報戦略(情報発信)が下手。

<b>良いところ</b>
観光協会ホームページへのアクセス数は 1日約10,000件と非常に多い 観光案内所の利用者が増加している 女性中高年の登山者が増えている 名人・達人ガイドの会は良い 良いものが残っている

<b>悪いところの原因</b>
観光事業者の接客態度が総体に悪い 単独でも今のところまだ食える観光地 近くにいながら情報交換や連携がない バラバラな観光看板の設置 ガイドブック・イラストマップがない 住民が観光から恩恵を受けていない 古い料金体系と変化のないサービス 各観光施設がバラバラに情報発信している。

<b>良いところの原因</b>
知名度がある奥多摩町 登山・ハイキング客が増加している 中高年の登山ブームが到来している 観光客から人気がある 手が付けられていない

<b>解決策</b>
町の杉を使ってトウテンポールを作り、町の玄関口や観光案内板に使用してイメージの統一化を図る。(トウテンポールの町) 青梅レトロのようなわかりやすいイラストマップをつくる。 町内を案内する観光ガイドの育成と拡充が必要である。 眠っている貴重な宝(物・人など)に光を当てる。 観光事業者の意識改革が必要である。 箱物観光ではなく人々の営みや風景を求める観光地づくり。



目標  
**観光客を増やしたい**  
(観光客が減少している)



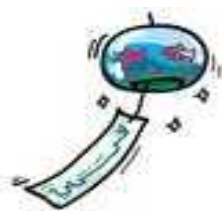
**悪いところ**  
ゆっくりくつろげる場所がない。  
釣場も旅館も今の時代に料金が低い。  
観光施設の接客態度が悪い。

**良いところ**  
緑が多く空気が澄んでいて環境が良い。  
住んでいる人達の心が暖かい。  
観光釣場は地域に貢献している。  
奥多摩には山野井さんのような人の宝を持っている。

**悪いところの原因**  
滞在型の観光施設や飲食店がない。  
料金を高くしないと儲からないと考えている。  
釣らせてやる・泊めてやるという意識と対応。

**良いところの原因**  
自然資源が多く残っている。  
田舎人特有の思いやりのDNAを持っている。  
地域住民の雇用場の確保と福利厚生に役立っている。  
奥多摩の山や環境に魅せられ有能な人達が集まってきている。

**解決策**  
住んでいる人が楽しく生きられるような町づくり  
観光だけの目的では1回くれば十分な町だが、住民と親しくなれば何度でも来たくなる町。  
自分の障地（奥多摩）に引き込んでしまう観光地づくり。  
観光釣場は、先払いの定額料金システムではなく、釣った種類や重さで清算する、後払いのシステムを導入すれば、割安感があり利用者も増える。  
観光釣場は、子供たち向けにマスのつかみ取りなどを定期的で開催するなど、サービスに変化を付けることが必要である。  
山野井さんたちが児童・生徒の授業や観光に関わっていただけるメニューづくりを構築する。  
目的を持たず漠然と来る観光客が増加していることから、奥多摩駅に2時間程度をウォークする有料案内ガイドを配置する。あわせてガイドを養成する。



内容
<b>地域づくりと観光</b>
鳩の巣観光



<p><b>昔の奥多摩観光の状況</b></p> <p>小河内ダムが完成する前の昭和 27 年頃から奥多摩の観光ブームが始まる。</p> <p>当時は列車と観光バスを乗り継ぐダム観光であったため、食事や土産物の購入で観光客が町に滞留した。</p> <p>昭和 32 年の小河内ダム完成に伴いダム観光はピークを迎える。</p> <p>昭和 39 年東京オリンピックを境にダム人気は下火になってきた。ダムが人を引き付ける魅力の限界点に達してきた。</p> <p>高度成長時代に突入すると、自家用車が普及しはじめ、家族単位でダムに訪れる観光地へと変貌した。</p>
---

<p><b>昔の鳩の巣観光の状況</b></p> <p>鳩の巣は元々観光的要素が強い場所</p> <p>鳩の巣観光は氷川観光よりも古く、昭和 2 年の 1 軒のそば屋が始まりといわれる。</p> <p>昭和 14 年には、土産物屋が 7~8 軒あった程、有名な観光地であった。</p> <p>昭和 32 年の小河内ダム完成に伴い、昼食・お土産場所として大変賑わった。</p> <p>自家用車が中心の観光地となったため、滞在型観光地から日帰り観光地に変貌した。従前は、バス・列車を下車しての滞留拠点であったものが、通過するだけの鳩の巣へと変化した。</p>
---

<p><b>現在の鳩の巣（西川）観光の状況</b></p> <p>東京都が「多摩の森自然塾」を組織して、荒れた森林を地主から借り受け、ボランティアにより薬師堂を中心とする森林を再生している。</p> <p>NPO法人「森づくりフォーラム」が東京都から仕事を請け負い、「鳩の巣協議会」を組織して、様々なボランティアを束ね、月 1 回の定例日に森林整備活動をおこなっている。このような活動で年間 1,500 人位の人達が西川に来ており、年 1 回の植樹祭を実施している。</p> <p>4~5 年前から「森づくりフォーラム」と地元の長寿会婦人部との交流が始まり、年 4 回「森のクッキング」というテーマで昔作っていた郷土料理などを教えている。</p> <p>西川の住民でホテルの餌となるカワニナを一生懸命育てている人がいる。農協からカワニナの餌を購入して繁殖させている。</p> <p>ホテルが飛ぶ頃は、外灯を消すということで、電気屋に頼み手動で消せるような外灯にしている。</p>
---



<p><b>鳩の巣（西川）の理想的な流れ</b></p> <p>観光客のために町があるのではなく、住んでいる人のために町がある。</p> <p>住んでいる人達が住み良い町は、観光客も楽しい町である。</p> <p>外の人と住んでいる人が交流することで、何度でも訪れる町づくりが可能となる。</p>
--

テーマ：町内観光施設の視察「第六回会議：18年9月11日（月）」



内容
<b>観光施設の視察</b>



時間	町内観光施設の視察	
9:00	役場	経営状況
9:20	丹縄亭（川井）「昭和63年開設」	平成18年3月撤退（赤字）
10:00	大丹波国際釣場（大丹波）「昭和31年開設」	ピーク時5万人が2万人に減少
10:45	海沢ふれあい農園（海沢）「平成19年開設予定」	平成19年4月新規オープン
11:30	ねねんぼう（日原）「平成16年開設」	開業して2年集客力は今ひとつ
12:30	とちより亭（境）「平成11年開設」	7年が経過して順調
14:00	森林恵工房峰（峰谷）「平成18年開設」	オープンしたてのシカ肉加工場
15:00	山のふるさと村（川野）「平成2年開設」	開設16年目の自然公園施設
16:00	役場	

丹縄亭 = 昭和63年に和食（懐石料理）を中心に奥多摩総合開発（株）が営業を開始、平成18年3月に不採算を理由に撤退した町営施設。平成18年4月から地方自治法の改正により、公の施設に民間が参入できる「指定管理者制度」が導入されたため、これを機に民間公募し、視察時には、後継者が内定済み。営業の再開は平成19年4月を予定している。

大丹波国際釣場 = 奥多摩町が昭和30年に誕生して、わずか1年後の昭和31年に開設した町内5釣場の中で一番歴史の古い国際釣場。昭和31年当時は、日本がまだ敗戦の後遺症を引きずっていた時代で、日本人がレジャーを楽しむゆとりのない中、またアメリカ人を奇異な目で見ていた時代に、横田基地の米軍兵士等を相手に「国際」と名付け商売を始めた老舗釣場。しかし、一時期5万人を数えた入場者も現在では2万人まで減少している。

海沢ふれあい農園 = 平成19年4月にオープン予定のグリーンツーリズム（滞在型余暇活動）の拠点施設。管理棟・農園・ラウベ施設等の整備に4ケ年を要したが、その間、海沢地域の受け皿的組織を確立し、管理運営責任者を全国から公募するなど、多彩な事業を展開してきた。地域が主役となる理想的なグリーンツーリズム事業の展開とともに、今後の奥多摩観光を占う期待される事業である。

ねねんぼう = 日原エコツーリズムの宿泊拠点施設として、平成16年にオープン。あわせて日原自然学校を開設し、盛りだくさんなエコーメニューを提供している。また、地域通貨「にっば」を発行するなど、ボランティア活動にも積極的に取り組んでおり、海沢グリーンツーリズムとともに新たな観光戦略として期待されている。

とちより亭 = 平成11年にオープンして7年が経過する手打ち蕎麦専門店、メニューは蕎麦だけという合理化経営。金・土・日・月の週4日営業で冬季期間は閉鎖という徹底した経営内容、しかし安定的な地域雇用が望まれる。

森林恵工房峰 = 町内における年間360頭の捕獲シカの有効活用のために建設された食肉処理加工場。シカ肉のニーズが非常に高く品薄状態で、今後、安定的な供給が望まれる施設。

山のふるさと村 = 開設されて16年が経過する東京都の自然公園施設。奥多摩町が指定管理者として運営を受託している。ビジターセンター・クラフトセンター・ケビン等に年間20万人が来場。



内容  
**観光施設の現状と問題点**  
**奥多摩とカヌー**



視察した観光施設
丹縄亭（川井）「昭和 63 年開設」
大丹波国際釣場（大丹波）「昭和 31 年開設」
海沢ふれあい農園（海沢）平成 19 年開設予定」
ねねんぼう（日原）「平成 16 年開設」
とちより亭（境）「平成 11 年開設」
森林恵工房峰（峰谷）「平成 18 年開設」
山のふるさと村（川野）「平成 2 年開設」

奥多摩とカヌーの現状
奥多摩カヌークラブは昭和 60 年に青梅市カヌー協会奥多摩支部として発足した。
奥多摩カップカヌー競技大会を現在までに 12 回開催している。毎回 150 艇程度が参加し、地方大会としては大きな大会である。
町に日常的にカヌーが定着してない。
観光振興と青少年の健全育成のための N P O 法人の設立を検討中。

視察した観光施設に対する意見
それぞれの施設が奥多摩を象徴しているが、バラバラでストーリー（一貫）性がない。共通性というか横軸のようなもので一本突き刺すコンセプトがほしい。
それぞれの施設が広く離れており、どうやってまとまればいいのか。
ただ待っているだけでお客を呼び込もうとしていない。
自分の時代で終わりと考えている施設が多いのではないか。
子鳥が親鳥の餌を待っている状態で、自分から餌を採りにいく姿勢が見えない。
観光釣場の料金は高い。釣果で清算するシステムの導入が必要である。
奥多摩町は広いのでエリアマップを作成し、歩かせる・店を紹介する・地域の歴史をつづるといった地域限定の地図（エリアマップ）が必要である。
釣場の接客の悪さが目立った。何しにきたのという横柄な態度が見受けられる。
奥多摩湖いこいの路（12 キロ）が山のふるさと村まで開通したら、山のふるさと村から帰る手段、例えば乗り合いタクシーなどの設備が必要ではないか。
森林セラピーのような「歩く」といったテーマを議論していきたい。
奥多摩とカヌー 「語り：伊藤 = 奥多摩カヌークラブ代表・小田 = 御岳カヌー教室代表」
東京に一番近い御岳には週末に首都圏からカヤッカー達が多く集まるようになってきた。
奥多摩はカヌーゲレンデとして最適であり、奥多摩カヌークラブだけで定着化を図るには組織的に無理なので、N P O 法人を立ち上げビジターから料金をいただき子供たちに無料で教えたい。
カヌーは金がかかるので 30 歳代くらいにならないと収入的に厳しい面があるが、カヌー人口の中心は 20 ~ 30 歳代が中心である。
カヌーの目線から見る奥多摩の山々や木々の美しさは最高であり、水・森・空気を感じ取れる。カヌーは奥多摩の観光にとってプラスになる。N P O 立上げの精神的協力者になってほしい。



内容
<b>観光の理念</b> <b>自然を活かした観光</b>



委員自由意見
<p>奥多摩湖いこいの路は入場制限するくらいにして、エコツーリズムの拠点ロードにしたい。これからの奥多摩観光は箱物の連鎖ではなく「線」「面」での連携が必要である。町内にルートをつくり、希望するルートに足を運んでもらう観光地づくりが必要。いくら自然や環境が良くても来る方も迎える方も「人」であり、迎える側の意識改革が必要。町には海がないだけで、山・川・自然資源などすべてが揃っている。それらをつなげること。町内各地域が自立・持続するためには、経済的なものが成り立たなくてはいけない。町内に歩くルート（道の楽しみ）をたくさん作り、電車・バスを利用する観光地づくりを行う。山道やハイキングコースをつなげて、歩く・食べる・泊まるの滞在型のコースづくりを目指す。これからは、子供達がターゲットでマーケットとして大事になると思う。</p> <p>「いい町にはいい店がある」「水のきれいな町は豆腐がうまい」と言われるが「あの店に寄って帰ろう」と言われる店づくりが必要である。</p>
<p>アースマンシップ自然環境教育センター代表：岡田淳氏</p> <p>学生時代にアメリカに渡り、外国は自然や環境についてどう考えているか勉強した。帰国後、自然や環境の分野に取り組むなら、ビジネスにつなげていくようにと言われた。自然の楽しさや恩恵など、私達が活かされている土台を知ることが大切なこと。我々は自然は資源であると考え、インディアンの人達は地球は生き物であると考えている。自然との一体感は山へ登った時の癒し感や危険箇所の察知など、すべてが重なった時に起こる。生きていく基本・人間の健康・自然の健康・命の重要性を知ることが大切で、そのために、自然を楽しみ、寝転がり・冒険したり、そういう自然教室を開催している。</p> <p>教室に参加する人は、多摩地域・23区・川崎・横浜などで、遠い人だと千葉・埼玉から来る。奥多摩は聖地だと断言している人達がいる。このような人達を定期的に受け入れるためには箱物はだめで、人が人を呼んで一緒に作っていく場が必要と考える。</p> <p>奥多摩で変えた方が良くと思うところは、登山帰りにひと休みするところがない。夕方に商店が閉まってしまう、町並みの色に統一性がないなど。例えば駅前にマクドナルドが調和の取れた色で存在していても良いと思う。</p> <p>「奥多摩にはシカが多いから困る」という考えではなく、地球上にシカがいる喜びを感じ取ることが大切で、死に絶えてしまっはいけないと思う。</p> <p>大人のプログラムとして、焚き火・野宿など自然とつながる体験教室が好まれる。</p>



内容  
何のための観光なのか



委員自由意見

峰谷地域は古い民家が残し、そこに住んでいる人達も含め観光スポットとして有望視される地域である。

大丹波イルミネーションは、12月1日から年内いっぱい期間に全150世帯の内、半分の70世帯が各家庭にイルミネーションを飾っている。また、12月23日にはイベントを開催し、子供達のハンドベルの合唱や大人の楽器演奏などの催しの他、焼きそば・焼き鳥・トン汁などの模擬店や地元の野菜・大根・白菜・ワサビ・ユズなどの特産物を販売し、1500名程が参加した大きなイベントをおこなった。

大丹波イルミネーションは、地域が自発的に行っているもので、役場にマスコミや23区の区民からも問い合わせがくるほど注目を浴びている。日本観光協会のホームページにも紹介されており、お台場のイルミネーションと肩を並べるほど有名になっている。

大丹波イルミネーションは、大丹波経済に貢献しているが、地域単位での継続は世代交代もあり難しい部分もある。しかし、行政に頼ってしまうと、いずれ実行委員会組織も費用も行政でやってくれということになりかねない。継続はしていきたいが、行政支援が必要な時にどのあたりまで関わっていけば良いのかが難しい。

大丹波イルミネーションは、地元の者が楽しむために行っているもので、外の人達に見せることを目的に始めたものではない。町づくりも同じで、自分たちが楽しめる地域にすれば、観光客は来るようになる。

「奥多摩スピリット」を柱にして、昔から奥多摩に伝わる伝統・文化・精神性などを地域ごとに調べて資料化し、子供たちに教え、アーポーヘーポーで視覚化をしていく。

日原自然学校（エコツーリズム）で行っている「昔の話し」「火おこし」など、昔行っていたことを復活させるだけでも、何かができるのではないかな。

「いきいきしたまちづくり」が観光の一番の目玉で「観光客に来てもらう」ではなく、「自分達がいい町だと思えば観光客は来るものである」という方法論が良いと思う。

今までの観光は「建物のサービス」「人的サービス」「料理サービス」だが、これからは「地域」「文化」「誇り」を中にも外にも発信していくことが重要である。

「奥多摩スピリット」を実現させていくには、車ではなく電車で来て「歩く」が重要になってくると思う。このことで、観光ビジョンもコンセプトもつながっていくと思う。

町内には、まだ見つからない面白い道が沢山あるような気がする。それらに手を加え第2弾、第3弾のむかし道作りをおこなう。

奥多摩に電車で来る人の90%は電車賃が安いと言っており、電車で来て「歩く」「歩かせる」のコースづくりをしていくことが必要である。

管内の駅前で、朝おにぎりでも販売すれば、山登りの人などは買っていくと思う。そういう意味でも、奥多摩の人たちは欲がないと思う。



内容  
1年間のまとめ



委員自由意見

2年間の検討期間の内1年間が経過し、来年度に向かって町長への答申までの流れを作っていきたい。残り1年間の委員会をこうしたいという意見を聞きたい。

奥多摩スピリットを軸に「癒し」「歩く」などを形が見えるようにしていくことだと思う。

青梅市吉野梅郷も10年かけて整備を行い現在の盛況があるように、我々がコンセプトをもって町理事者とやりとりする機会が必要である。

この1年間の成果として、「奥多摩の食や自然、文化を生かし、訪れた人に安らぎが与えられるような町づくりや観光を」について認識できたと思うし、これからの1年間のテーマになっていくものと思う。

委員会でまとめる報告書については、目的や明確なメッセージを入れ、いかに興味のある人たちに理解してもらうかが大切である。

意識改革にしても、町の中で挨拶すら少ない状況の中では、10年、20年経っても変わらない。できることから始めなければならない。

観光のための町づくりではなく、自分たちの住んでいる町を良くすることが、結果的に観光に結び付く。自分たちが奥多摩は本当に良いところだと実感することが重要である。

「歩く」「癒す」のイラストマップコースの中に「食めぐり」「滝めぐり」「清流めぐり」などを入れ、スタンプラリーという形で各店舗や各名所にスタンプと説明看板を置き、完歩したら好きな店舗で1食無料で食事ができるなどしてみたらどうか。

明るい町・美しい町・住んでいて楽しい町という抽象的なもので、何をしたらそうなるのかわからない。今後の1年間は「めぐる」などをテーマに議論していくべきではないか。

今後の1年間は、各委員が1番訴えたいことなどを頭の隅において会議を進めていきたい。19年度は定例会・研修会などの進め方や方向性について検討していきたい。

群馬県川場村の「道の駅」に視察研修に行ってみたい。この道の駅には年間60万人の観光客が来ており、オバアサンが農産物を年間で70万円程度販売したり、多い人では年間に240万円も売り、村全体がひとつの道の駅で大変賑わい・活気づいているところである。

都会の観光客が観光地に求めているものは昔と違う。「奥多摩の問題点は何か」「求めているものは何か」「求めているものが出来るのか」これらを整理する必要がある。

「受け入れる側で何が出来るのか」「奥多摩では何が出来るのか」を検討し、「それに合ったお客さんに来てもらう」という方が現実的であると思う。

「奥多摩駅前を良くする」とは、誰に対して良くするのか。地元住民に対してか、観光客に対してか、この当たりの理念が今後、重要なものになってくると思う。



内容
1 番伝えたいこと



委員自由意見

そこに住んでいる人達の暮らしを大切にしながら、町づくりをしていくことが観光につながる。「歩く」「伝統」「文化」「癒す」「ゆったり」という中から、キーワードは「団塊世代」だと思う。今年は600万人が定年を迎えるので、団塊世代の体験コースを作る。たとえば、団塊世代は物がなかった時代に生きてきたので、囲炉裏に火を起こすのが大変うまい。「火」は癒し効果があるので「焚き火」を体験したり、不便な生活をすれば時間がゆったりと流れるので、「昔体験コース」を設定する。愛宕山やいこいの路などを歩かせ、健康に結び付けながら滞留するコースをつくれば、経済にも結び付いてくる。

奥多摩に目的もなく漠然として来る人がいて、どこに観光に行けば良いのか観光案内所に聞いてくる。このような人達には、パソコンを利用した情報発信が大切であると思う。JRを使い奥多摩に来させて「自然体験」のプログラムを提供して「人を奥多摩に来させる」ことを訴えていきたい。

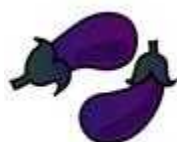
奥多摩に「来てもらうためにはどうしたらいいのか」ということで、5年後・10年後を考え、地域住民が花木等を植栽し大切に受け継ぐことで、次世代につなぐ観光名所になっていく。

国土交通省が発行している「観光まちづくり」のレポートに、地域の資源として、「癒しの問題」「素敵な歩く場所」など、地域独特のオンリーワンの資源をいかに磨くかが大切と書かれている。地元住民・地域資源・来訪者の三者が調和のある発展をしないといけない。「本当に奥多摩が好きだ」という人達をつくり、その中で「住民との関わり」をどうしていくかが一番重要である。

いつまで経っても旅館や民宿・キャンプ場や観光施設だけが観光ということでは、住民の観光に対する意識は低下するばかりである。現に宿泊施設周辺の住民は、宿泊客の花火の音や観光ゴミの臭いで迷惑しており、宿泊施設の経営者は潤っても周辺住民には還元がないので、相反する立場になってしまい、観光客に対してももてなしの心が生まれにくい。このため、観光が直接的にこれら住民に還元される仕組みづくりが必要である。

「自然とふれあう観光」「JRを利用する観光」「住民の対応、地元の考え方、地元が潤う観光」の三つがこれからの観光に必要である。また、奥多摩駅周辺を整備し、飲食・買物などを充実し癒される空間づくりが必要である。

京都美山町のかやぶき屋根は日本で一番多く残るところであるが、残った理由は貧しい村で家が立替えられなかったからである。ある時、住民たちが「財産」になることに気づき、保存しようと考え、行政も保存のために90%の補助金を出している。今では日本一のかやぶき屋根の町として、多くの観光客が訪れている。スイスでも同様に「デカップリング」という制度をつくり、農家に補助金を出して「ここに留まり農家をしてくれ」「生計は国で応援する」という仕組みをつくり、景観を保護している。いずれも、行政の支援があって成り立っているが、補助金をもらうだけの関係ではいけない。



内容
キーワード探し



委員自由意見

委員長提案【奥多摩スピリットの流れ】

町づくり（観光地づくり） 町に活気ある暮らしが息づいていなければならない  
町に活気があるところ（観光地としても旬） 活気ある町とは（住民がその町  
が好き・町に誇りを持っている） 誇りを持てるとは何が重要なのだろう 地域  
の文化を大切にしている・経済的に自立している 経済的自立に観光を奥多摩は求  
めたら良いか いやし・歩く・和み・普段着・生きた文化・絆・森林セラピー・健  
康・ゆったり・五感を研ぎすます・五感を育む

（委員自由発言）

いわゆる箱物観光ではなく、固定的な奥多摩ファンを獲得し、じっくりと自然に親しむ町になれればいいと思う。奥多摩スピリットという言葉翻訳して、一般の人達にわかりやすい言葉に置き換えていけば、何か核になるものが出てくるのではないかな。

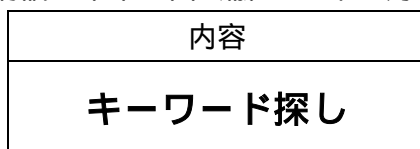
スーパーバイザーの今村さんが言っていたキーワードの中に「東京の健康ランド」という表現があったが、癒し・歩く・森林セラピーなどは、心と体の健康を意味しており「健康」に結びつくキーワードが良いと思う。

「和む」という言葉は良いと思う。一人で和むことはなかなか出来ないもので、人とのつながりという意味で「ゆったり」「和らぐ」という感じである。

「健康」という言葉は突き詰めていくと、心も何もかもきれいになっていくような感じがする。いこいの路を歩き、奥多摩の魅力探しや言葉探しをしたい。そこから、「歩く奥多摩の魅力」や「奥多摩スピリット」などに結び付けていけたらと思う。

京都の美山町の助役が「ただの観光地になってはだめだ」「一番大事なことは、そこに人が居ること」「博物館のような所ではなく、そこに色々な人が住んでいて元気なこと」これらがお客さんを呼ぶ大きな要素であると思う。

大丹波はイルミネーションで盛り上がっているが、土台になっているものを言葉で表現すると「文化」「伝統」「お祭りは長男がする」「家族」「絆」などが浮かぶ。



### 委員自由意見

#### 委員長提案【まとめ方に向けたキーワードさがし】

（委員自由発言）

観光地には、住民の日常の暮らしが見えていないと活気ある場所にならない。

いくらコンセプトがしっかりしていても、町並みが綺麗でも住んでいる人の顔が見えなければ「1回行けばいいや」になってしまう。

「1日ゆったり」というキーワードが良いのではないかと。重要な点はどこでお金を落とす仕掛けを作るかという点である。

過疎とかマイナスと思われる部分をプラスに変える。「昔の暮らし」などが息づいているところもあり、伝統や文化をしっかりと引継ぐことが重要である。

住んでいる人が観光につながっている。仕事をしているという一体感が必要である。そうすれば町の雰囲気も違ってくると思う。

いこいの路を12キロ歩き、山のふるさと村の「ヤマセミ亭」で昼食をしてもらい、ボートでダムサイトまで送るという方式が良い。

いこいの路のイラストマップをできるだけ早く作成したほうが良い。

観光まちづくりは、役場だけが一所懸命に頑張ってもダメ。観光協会・JA・森林組合等が力を合わせて行わなければならない。

奥多摩町の観光は「小布施スタイル」ではなく、「川場スタイル」が良いと思う。

「観光」というものは「まちづくり」で、観光のための町づくりではないと思う。

「まちづくりは役場の職員がやることだ」といったように、人任せにしている部分が多いように思われる。地元の人が皆んなやる気になって参加しなければならない。

奥多摩の観光は「川や山や湖の道を歩き、自然を味わっていく」これが重要であると思う。

人が沢山来ることが目的ではなく、「来た人達に喜んでもらう」その結果「経済的な恩恵も受ける」「そして地域が持続していける」が大切であると思う。

森林セラピーの町として推進していく場合、ロードを案内する有料ガイドのような制度が必要になってくると思うが、それらに多くの人に関わるような仕組みを作れば、住民の観光への関わりや雇用が生まれてくる。

観光スポットとして、他との差別化を図る必要がある。

奥多摩の「食」について、作るのもあるし、自然のものもあるし、「食」は落としどころであると思う。



内容
自由意見



委員自由意見

鳩の巣山鳩にて懇親会を兼ねた会議

（委員自由発言）

観光イベントの見直しについても、当委員会で議論していきたい。

「人と精霊と営みの中へ」は、キャッチコピーとしては面白いと思うが、文書で説明するのは難しいことであると思うし、「精霊」は「こだま」と読ませることもあるので、宗教的になってしまうかも知れない。

町の歴史や文化を観光に取り入れる場合、昔から伝承されている獅子舞があるが、町内に13の獅子舞があり、これを人形に被せ四方のガラス張りの中に入れて展示すれば、13×3で39体の獅子舞に囲まれた部屋は威厳があり、数百年も受け継いできた先祖の精霊がよみがえり、見る人を圧倒すると思うし話題性もあると思う。年1回の祭礼時に各地域が展示室から持ち出し、終わったら戻すということで、普段は町が預かる形が良いと思う。例としては、秩父の「祭り会館」が地域の歴史と文化を観光に取り入れたものである。

「人の営み」や「人を大切にすると」といった言葉を入れると、実際に奥多摩に来た人達が住民の対応等を見て、そのように思うかが心配である。

ビジョンの中に「人々の営みが素晴らしい」と書いてしまうと、来町した観光客が来て見たら「何だ」ということになってしまわないか。

すべての人に満足してもらおう観光地づくりは不可能であって、奥多摩はこういう場所だからということで、喜んで来てくれる人達を大切にすれば良いと思う。

「人の精」「水の精」「山の精」「人の魅力」と言ってしまうと、住民自体が変わらないといけないうし、住民を変えることは難しいことである。

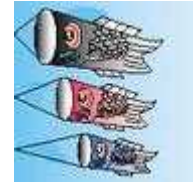
「人の営み」や「山村の営み」をビジョンで打ち出しても、今現在、特別な人がいるのか、特別な物があるのか、特別な事をしているのかと聞かれても、都市部と変わらない人と生活があるのだから、聞かれても困ってしまう。

「人の営み」とかいうものではなく「奥多摩の歴史・文化を訪ね歩く」のような形にしたらどうか。例えば「馬頭観音めぐり」という仕掛けで、定年を迎える元気な人達が有料ガイドになって訪ね歩く。そういう「歩き道」を各自治会や集落ごとに作成することで、ツーリズムになると思う。エコツーリズム・グリーンツーリズム・森林セラピーもそういうところに向かっていくと思う。

観光でお金を落としてもらうことが、ビジョンを策定する上で大切だと思う。



内容
答申案について



#### 委員自由意見

「歩き道マップ」「町営釣場検討委員会」というのは、一番最初にやりたいという思いがある。委員のコメントについては、先般いただいたレポートをそのまま載せただけで、十分に追加・修正・補正ができる。

「山村の知恵を今に」というのが頭に据えているので、それに対するコメントなのか、委員会に参加している皆さんのコメントなのか、はっきりしておかないといけないと思う。

「山村の知恵を今に」は副題で、その前に「人と精霊の営みの中へ」というのがある。これを具現化するには、本物のコピーライターを入れたほうが良いという提案もあるが。

委員のコメントではなく、「2年間を振り返って」としたほうが、コメントしやすいか。

委員のコメントは、最初のほうのページで凝縮した1ページをつくり、それに向かってコメントをするというやり方はどうか。意見がバラバラでなくまとまってくると思う。

「奥多摩弁」は良いと思う。奥多摩弁を使った答申書が良いと思う。

せっかく委員になったのだから、ひとり1提案ができれば良いと思う。

観光客という言い方ではなく、「交流人口」という言い方をしたい。

よく大丹波の人達の団結力や人間性が話題になるが、その基盤にあるものは釣場だと思う。昭和31年に釣場を開設し、地域の団結力でここまで盛り上げてきた。大丹波の人達にはそういうDNAが受け継がれていると思う。だから町営釣場の存続は絶対必要である。

住民が観光で働ける町というテーマで色々な提案を出してほしい。団塊の世代が多く離職する時代に突入する。

風習や文化を大切にするという提案は良いが、観光にどう結び付け、経済性につなげていくかが難しい。提案だけで観光に結びつけていかなければ、教育・文化の世界に留まってしまう。

イベントで「しいたけづくり教室」は非常に人気がある。ほだ木にドリルで穴を開け・種ゴマを打ち込む単純な作業であるが、都会の人達からすれば、普段はコンクリートやアスファルトの上を歩いているので、土を踏むことも、ほだ木を持つことも、ドリルを手にもすることも、種ゴマを打つことも、すべてが都会にない非日常がそこにあって新鮮なことであり、奥多摩は何もないどころか、都会から見ればすべてが「宝物」なのかもしれない。

観光イベントに多くの人達が参加し、人気があるのだから、これをビジネスチャンスにつなげていくべきである。「観光ビジネス」を委員会で提案していきたい。

参加する・体験するといったメニューがなければ、1泊・2泊をするにも道具がないわけで、どのような道具をつくって売り出していくかが重要であり、こちら側から体験コースを提案するような新たな観光地づくりが必要である。

「お宝リスト」をつくり、人・物を登録して活用していくようにしたい。



内容
答申案について



委員自由意見

具体的な提案内容については、このような内容で良いと思うが、提案の上に位置する基本方針（コンセプト）の言葉をどうするのか。

基本方針を先に決めて、提案内容を決めていくということは非常に難しい。例えば、「山の精・水の精の奥多摩」という基本方針を決めてから、提案施策を出せと言われても無理であり、奥多摩町の観光の現状がどうで、何が不足していて、これから何をしなければいけないのか、そういうことを先に出して、その結果、上にくる基本方針という言葉を探していかないと無理である。

提案の前にくるコンセプトの概念として、観光は町づくりであって観光客のためではなく、住民のためにするのであり、住民が住んでいて良かったと思える町づくり。これに近い言葉になると思う。委員には、次回会議までの宿題としたい。

今まで、観光というのは、「何かしてもら」「される」というものであったが、これからの奥多摩観光は「何かをする」というものになってくる。この辺が基本方針のキーワードか。

提案内容の「パッケージツアー」は、いかにも旅行会社の言葉なので、奥多摩らしい言葉にならないか。

前回会議までの「山村の知恵を今に」というタイトルで考えると、いくつかの提案内容が溶けてしまう気がするし、残すとすれば、提案内容に山村の知恵をもっと盛り込まないと、整合性に苦しい。

この委員会は、町に政策提案をする機関であって、実行部隊ではないので、提案内容は「します」ではなく、「提案します」という表現になる。

個々の提案内容に関連性があるのか、同一のものか、上にくるものか、下にくるものか、単独か、を整理していかないといけない。パッケージツアーにしても、町のお宝さがしのためのものなら、旅行会社のパッケージツアーとは別物だし、中身をきちんと委員会で理解しておかないといけない。

提案の内容は、文字を統一して、やさしい表現にしたほうが良い。

提案内容は、全体を文書でまとめるのではなく、ポンチ絵的な見せ方が良いかもしれない。

今回の観光ビジョン策定委員会は、これまでの行政委員会にはない、楽しい委員会になっている。そのため、提案内容もこれまでの行政文書に比べてユニークなものにしたい。

提案内容を文字だけで理解するのは、硬すぎるし読みづらいので、まとめ方をわかりやすくしたほうが良い。

提案内容の中心的な柱は「歩く」ということだから、歩きに関する提案は重点項目にしていきたい。

提案内容は問題ないと思うが、優先度を明記するような見せ方が良いと思う。



内容
答申案について



委員自由意見

\*（答申案に対して変更すべき意見のみ記載）

（全）提案したい施策を構築しないまま、コンセプト（キャッチフレーズ）が先行しても、最後に噛み合わなくなってしまう。「コンセプト・サブタイトルは、次回以降の会議で決定する。」

（短）山里歩き絵図については、「スタンプラリー」のようにして、21全部を歩いたら何か景品をあげるようにしたい。そうすれば、話題性とチャレンジ性が高まると思う。

短期提案や中・長期提案にも「サブタイトル」がほしい。

（短）「地球的規模で進む温暖化・・・」ではなく「別の言葉」がほしい。

（短）「テレビなどで放映される健康番組等・・・」は、「健康への高まり」で良いのでは。

（全）全体的に「やさしくやわらかい言葉」にしてほしい。

（ ）「各種研修会や先進地視察を行う」は削除したほうが良いと思う。

（短）山里歩き絵図 21 シリーズの他に「総集編 22」を加え、「町内 13 獅子舞や貴重な伝統行事」などを紹介したらどうか。

（ ）観光イベントの充実の中で、森林セラピーの他に「エコツーリズム」「グリーンツーリズム」を入れたほうが良いのでは。

（ ）観光施設というと、民間施設も含めての話になるので「公共観光施設」にしたらどうか。

（ ）現状と課題の表現が具体すぎるので、「レジャーの多様化」「少子化」にしたらどうか。

（ ）は、宿泊プランではなく「体験型プラン」にしたらどうか。

（ ）に「広報・宣伝」について入れたほうが良いのでは。

答申案の表題については、「奥多摩町観光ビジョン策定委員会提案書」にする。

委員のコメント（想い）は、各自、A4サイズ1枚で800字にまとめ、事務局に提出する。

次の1月会議で、最終的な内容まで詰める、2月会議では印刷可能なレベルまで仕上げる。3月会議は冊子にして見ていただき、その後、町長に答申書として提出する。

提案内容については、いきなり短期提案「山里歩き絵図」が来るのではなく、前ふり（解説）がないと分かりにくいのではないかと。環境の話にしても前ふりがあればつながっていく。そのため、「委員会の検討の柱」のような前ふり（前段解説）を作成して入れる。



内容
答申案について



#### 委員自由意見

\*（答申案に対して変更すべき意見のみ記載）

委員長：地方の町がいつまでも東京のコンサルに高い金を払って自分達の町の将来を考えている時代じゃない。自分達の町は自分たちで考える時である。そういう意味でもこの観光ビジョン策定委員会は、2年間コンサルも入れずに、本音でよく議論してきたし、このようにまとめることができた。いよいよ最終的なまとめとして、このような本（報告書）が出来上がってきた。町長への答申に向けて、最終的な段階に入ってきたので、委員の積極的な意見をいただきたい。

目次の6, 7, 8は、5を親にして とする。

メディア戦略は大きく複雑多岐に渡るので中・長期提案の7つ目の提案から除外する。

短期提案「山里歩き絵図」の「滞留する」の中の「観光地が実現できます。」は「持続可能なまちが実現できます。」に変更する。

短期提案「山里歩き絵図」の説明の中の「迎え入れる側の我々も」は「迎え入れる側も」に変更する。

「山里歩き絵図」のチェックポイント制度は、チェックポイントチャーター（検問所）の意味を持ち、21集落の山里歩き絵図の21チェックポイントの写真を観光案内所に持参すれば、「完歩証」と「記念品」を贈呈する。郵送や電子送付は対象とせず、来町して持参することを原則にする。そのことでも1回来町が増える。

「21世紀」「21の宝探し」は、よく見つけた言葉である。21世紀に21の集落が現存しているというタイミングを捉えている。「山里歩き絵図」を平成21年度にデビューさせれば、トリプルトゥエンティワン（3つの21）になる。

「山里歩き絵図」の「滞留する」の文中の「都市住民」は削除する。

中・長期提案の「住民参加の観光」の中で、「住民」が多く出てくるので整理する。

同じく「観光は、観光客のためにあるのではなく」は「観光は、地域が持続していくための一つの方法」と変更する。

「伝統・文化の活用」の「提案内容」の文中、「都市住民」は、「住民との交流が盛んになり」と変更する。

「イベントの充実」と「体験型プランの提供」は、は官主導で行う各種観光関連イベント、は民が単独営業している題材を連携させて、一体型体験プランを提供するという解釈で認識すること。

委員各自のコメントを修正する場合は、1月いっぱいまでに事務局に提出すること。



内容
答申案について



### 委員自由意見

\* (答申案に対して変更すべき意見のみ記載)

\* キャッチフレーズ・サブタイトルフレーズの決定

#### 委員提案内容

「東京にもきれいな空気、水があります。」「そして、そこに住み続けてきた人がいます。」「それは、奥多摩という地です。」

「来るたびに何かを感じる町 奥多摩」

「歩いてみたくなる町 奥多摩」

「車から降りた町」

「車の窓からは見えない町」

「車が似合わない町」

「山村に点在する21の集落」「そしてそこに住み続けてきた人がいます。」

「何もないよ 奥多摩」

「自然の中にお宝が(スピリット21)」

「どうよ奥多摩再発見」

「忘れかけたものが見つかる町」

「当たり前なことに気づいたら、いろんなことが見えてきた」

「山で息づく人々の想いが奥多摩にはあります。」

決定(コンセプト・サブタイトルフレーズ)

「おくたま観光スピリット21」

(足もとをみつめたらいろんなことが見えてきた)